

## 助っ人のいらぬ鼠撐器

薬学雑誌 1891年度(明治24年) p61

最近では組換え細胞やシミュレーションなどを使うようになったとはいえ、丸ごと動物、特にげっ歯類の実験は依然盛んである。有望化合物ならずべて、どんなプロジェクトでもネズミの実験は避けて通れない。しかし昔はどうだっただろう。合成者は何でも舐めていたし、薬効はまずヒトで試されたのではなかろうか。

ちょっと怖いから動物に飲ませてみようと思っても、ネズミではなく、そばに居たネコやイヌが多かったように見える。華岡青洲の通仙散はネコだった。N数を増やさねばならないようなナイーブな実験は最初からしない。ネズミを捕まえてくるのも面倒だ。何より犬猫と比べてネズミではあまりにも人間と違いすぎる。小さくて表情もなく、同じ哺乳類だという概念などなかったかもしれない。

それでも数量的科学が西洋から入ってくると、急性毒性を見るにネズミは重宝しただろう。ただ、その取り扱い技術はお粗末だった。南京鼠(マウス)に皮下注射するのに「大概助手をして鼠を保持せしめ、二人掛り」で行っていた。ところが東京衛生試験所(現・国立医薬品食品衛生研究所)がベルリンの器械商ラウテンシュレゾルに誂文、取り寄せた装置は画期的だった。「此の器械は助人に持たしむるより却て便にし



て、医学校、病院、その他の試験に必要なれば」と紹介したのが図の鼠撐器である。

当時の東京衛生試験所長は長井の後を受けた田原良純。彼はこのとき35歳、ドイツに留学中であつた。ひょっとしたら「当地には斯くも便利なるもの之あり候」との手紙を受けた所員が注文、輸入したのかもしれない。

小林 力